ニュースレター
# かけはし
vol. 10
2012年7月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

## 目次

特集：学生としてアメリカに住んでみて (辻井 快/Kai Berttenberg) 1~2
わが街／専攻紹介：建築・インテリア建築・オブジェデザイン学科（School of the Art Institute of Chicago） (鈴木 ケビン 健介) 3~4
留学体験記 (宇野 裕美) 5~6
特集：「国際化」の大きな意義 (ホーン 川嶋 瑤子) 6~7
連載：（2）自信について (小野 雅裕) 8
メンタープログラム特集１：メンタープログラムに参加してみて (渋谷 洋平/ 三野 智子) 9~10
メンタープログラム特集２：メンターによる座談会 11~12

## アメリカ、そしてアメリカ人は留学生をどう見ているか —学生としてアメリカに5年住んでみて—

UC Davis
辻井 快/Kai Battenberg

「グローバル化」は私が日本の大学に在籍していた頃から新しい時代を背負って立つ人間に必要な要素として、大学の入学案内や企業説明会のパンフレットなどに必ずと言って良いほど使われていましたが、その頃の私にはその「グローバル化」の意味や影響について理解するために必要な経験を持ってはいませんでした。だからこそ思うのですが、自分へのグローバル化の影響を日本にいながらにして実感するのは難しいでしょう。私も学部生としてアメリカの大学に入学してから5年、University of California Davis（以下UC Davis）のPlant Biology Graduate Group(以下PBGG)に在籍するようになってやっと、大学院生としての自分へのグローバル化の影響を自分なりに考えられるだけの経験を得られたように感じます。ただ、私はこの場でグローバル化の是非を議論するつもりはありません。議論したところでその流れが変わることはないでしょうし、良い点も悪い点もあって当然であろうと考えるからです。むしろここでは、アメリカで勉強している他の日本人の大学院生やアメリカの大学院に進みたいと思っている学生の方々に自分の経験と実感を伝えることに重点を置きたいと思います。

### 「アメリカ＝グローバル」?

まず、アメリカの社会全体を考えた場合。そもそもグローバル化が進んでいると思われているアメリカですが、実際に住んでみるとそれはアカデミアなど一部の分野でしかないことが分かります。人種こそ多様ですがアメリカに住む多くの人たちは日本と比較しても決してグローバルであるとは言えません。実際、私は学部生としてCalifornia State University Stanislausという小さな大学に通いましたが、そこの生徒達のほとんどが地元出身者で生徒はパスポートも持っていませんでした。また、カリフォルニア州はその州のみをもって十分他の国と比較できる程の規模の農業を誇っていますが、それにからんで南アメリカから特に多くのヒスパニック系の人々が労働力として流入しています。初めて大学のある街についた際、寮に行く道が分からず人に尋ねると「英語が分からない。」とスペイン語で返事をされたことを今でも覚えています。この移民問題はアメリカでは深刻で、アメリカ人の中には現在アメリカにいる全ての不法移民を一斉に強制送還するという強硬な姿勢をとるべきだと考える人もいます。何も留学生を不法移民と混同する気はありません。ただ、移民によって築かれた国アメリカであっても外国人が流入することのマイナス面を懸念する声は確かにあるということです。

> 初めて大学のある街についた際、寮に行く道が分からず人に尋ねると「英語が分からない。」とスペイン語で返事をされた

### アカデミア国際化の内情

研究に重きを置く大学に限って言えば、外国人の数もかなり多く一見すれば外国人に対してオープンであるように見えます。しかし、実際には大学側もそれには重大なリスクが伴っているというこ

とをよく理解しています。ここで言うリスクとは、端的に言えば、海外からの学生を受け入れれば受け入れるほど、代わりにアメリカの学生が教育を受ける機会を失っていくということのリスクです。これが学部生のレベルであればそのリスクも少なくて済むでしょう。大抵の大学ならば毎年数千数万人規模の学部生の入学者がいるでしょうし、海外の学生を受け入れることはアメリカの学生にグローバルな教育環境を提供できるというメリットも伴うからです。しかし、受け入れ人数のはるかに少ない大学院生に限って言えば状況が違います。自分の例でいえば、私の属するPBGGでは同じ年度の入学者数は私を含め5人。つまり、私が入学したことでアメリカ人の入学者数を20%カットしたことになるわけです。このリスクの影響力はことのほか大きなもので私もその影響を直接受けました。

「アメリカ人として受験した方が合格する確率は高いでしょう。」... 海外からの学生を受け入れるにはその分多くの費用が受け入れ先の研究室にかかるからです

私は生まれも育ちも日本ですし、日本人としてこの文章を書いています。しかし、私の父はアメリカ人なので、アメリカの大学院を受験した際には日本人として受験するかアメリカ人として受験するかという選択肢がありました。どちらが良いか悩んだところで分かりませんでしたし各学校に問い合わせれば済む問題だったので、受験するつもりでいた約10校にとりあえず全て電話しました。するとどの学校も答えは全く同じでした。「アメリカ人として受験した方が合格する確率は高いでしょう。」電話の相手は私に対して私の置かれている現状、成績、学校名などなにも聞きはしませんでした。つまり、成績等その他の条件に差がなければ状況にかかわらず日本人であるよりもアメリカ人であることの方が有利だということです。このことの直接の原因は海外からの学生を受け入れるにはその分多くの費用が生徒にではなく受け入れ先の研究室にかかるからです。（これは大学院生に対して賃金を出すアメリカならではの問題と言えるかもしれません。）ただ、その背景にはアメリカ人学生の教育を受ける機会の喪失を防ぐという目的があるのではと感じます。

## 大学院の専攻プロセスに関わってみて

さて、ここまではグローバル化の先進国であるアメリカでも留学生を受け入れているのはそう単純なことではないということを書いてきました。では、なぜそれでもアメリカが少なくともアカデミアの分野で比較的オープンでいるのか。私の経験から思うにそれは、アメリカ人が実力に対し貪欲であるからではないかと思います。アメリカに来て思うのは、アメリカ人が自分たちの欲しいものに対してストレートであるということです。大学院に入って半年ほど経ったころ、PBGGの最終選考に残った来年度の候補生達がキャンパスを見に来るのでキャンパスの案内などを手伝う機会がありました。その数日後、驚いたことに今度は最終選考のプロセスを手伝って欲しいという連絡がありました。私はそもそも学生である自分が選考のプロセスに参加するということに驚いたのですが、特に印象的だったのはその議論の内容でした。最終選考に残った学生のおよそ三分の一が海外からの留学生でしたが、アメリカ人への教育機会の提供、学校側の経済的な負担などは全く議論されず、ただどの候補生であればPBGGにとってプラスになるかということだけが議論されていました。つまり、一旦最終選考に残りさえすれば、言い換えれば受け入れるに足る実力があると判断されさえすれば、そこには国家のポリシーや経済的負担など全く関係なく、あるのは良い学生が欲しいという気持ちだけだと感じました。もちろん私の経験はUC DavisのPBGGに限定されます。しかし、候補生の実力について議論していたその気質が他の学校やプログラムと極端に違っているとは思えません。そしてこの気質こそ、アメリカがグローバル化の先進国として外国からの留学生に対して比較的オープンである理由なのではないかと思います。

最終選考に残った学生のおよそ三分の一が海外からの留学生でしたが、アメリカ人への教育機会の提供、学校側の経済的な負担などは全く議論されず、ただどの候補生であればPBGGにとってプラスになるかということだけが議論されていました

余談ですが、私は日本から来た学生として、この選考過程に参加できたことをとても嬉しく感じました。自分も候補生であったときには同じプロセスを通過したのだということが分かり、自分が合格したのは、議論の結果、他の何でもない自分の科学者としてのポテンシャルが評価されたためであるということがはっきりと分かったからです。他の日本人留学生の方も自信を持って良いと思います。

辻井 快/Kai Battenberg
カリフォルニア大学デイヴィス校　植物学グループ
UC Davis, Plant Biology Graduate Group

校内の植物園で栽培されているスマトラオオコンニャクが間もなく開花します。まだ咲いてもいないのに近くに寄るよると相当くさいです。

# わが街／専攻紹介：シカゴ美術館附属大学 建築・インテリア建築・オブジェデザイン学科

School of the Art Institute of Chicago
鈴木ケビン健介

## シカゴ・ライフスタイル

インターネットなどを使って検索すれば、シカゴについての情報は五万と出てくる今日。この記事を通して僕が伝えるべき内容を考えた末、体験を通して感じた事をもとに、今回は「シカゴ・ライフスタイル」というテーマで、シカゴを紹介したいと思います。

10年毎に行われる2010年の米国人口統計局によると、45％が白人、33％が黒人、29％がラテン系、6％弱のアジア系、といった分布で構成されているシカゴには、多様人種と多様文化が織り混ざるアーバンパッチワークがあります。都市インフラ設備とグリッドシステム（碁盤状都市計画）が文化というパッチワークをホットサンドのように挟んでいるイメージです。

シカゴは環境負荷を軽減しながら、文化的にも栄えるグリーンでスマートな都市を創造しています。また、20近い大学教育機関での最先端研究や、ビジネス、文化が共存している都市でもあるシカゴ。「オヘア空港のあるシカゴ」から「また行きたいシカゴ」なるよう、ぜひ注目して下さい。

シカゴ市の景色。　工事中の公園。

## ヒップスター

ここで、トーンを変えたい。

常に進化する都市「シカゴ」の社会産物は、ヒップスター。中流の家庭に生まれ、アートやDIY文化を先走る。年齢は20代から30代。熊のような髭を蓄えている男性。服装は、ラフ。中古、貰い物、拾い物。買い物はSalvation　Armyへ。ブランド物は基本的にいらない。近所の中古屋で見つけた70年代ビンテージのレイバンのサングラス。家具は、路地裏から拾ってきたものばかり。インディ音楽を好み、家にはぎっしりLPが揃う。BonIverは聞かない。少なくとも、本物のヒップスターは。

ヒップスターの交通の足はチャリ。固定ギアロードバイクを愛用。タイアは細ければ細いほどクール。ちなみに公共交通機関は極力使わない。トークも実にうまい。バーやアートギャラリーに行けば、大体友達。数学や哲学、又はビジネスの修士学位を持っている人も多い。カウンターカルチャー思想を持ち、メインストリームを嫌い、ニッチ消費傾向がある。マスメディアには左右されない。政治批判やマイナーな白黒映画の会話は朝方まで終わらない。自分の意見をはっきり持って、地産地消やローカル主義を語る。ビーガンやベジタリアンも少なくない。こだわりがある。

> 自分流へのこだわり
> だけど、最先端は常に手元に

だが、皮肉にも手にはiPhone。最新の情報は手の中に握っている。Facebookなどの身近な仲間の情報にはしっかりと目を通す。近い友達の輪を大事にするのだ。

最後に、何故ヒップスターについて話しているのか説明したい。選択肢が多くなった現代社会で、自分のしたい格好、自分が納得できる消費、自分が正しいと感じるライフスタイルが若者の間で存在している。自分の価値観に合った道徳的な選択をし、ライフスタイルとして表現している。

枠組みを自分で考え、常識から自分を解放し、自転車に乗って、自らの脚力で、自分の道を進む。自分のライフスタイルを模索し、築き上げていくライフスタイル。そんなワクワクする自由な生き方が、シカゴにはある。

## 建築・インテリア建築・オブジェデザイン学科

シカゴ美術館附属大学にて僕が所属するデザイン学科は、Architecture, Interior Architecture, and Designed Objects (略してAIADO)と言います。聞き慣れない学科名かもしれません。そもそも建築やインテリアデザイン、プロダクトデザインは「切っても切れない関係」で成り立っているのです。その「思想」が総合的な学科という「カタチ」になったのです。

更に、シカゴ美術館附属大学は、基本的に専攻という枠組みはありません。デザイン生は彫刻や絵画や音響の授業を取ることができれば、パフォーマンス・アーティストが建築や陶芸やCGの授業も取れるように、まず作家のアイディアやコンセプトがあり、それらを実現させる為に大学の授業を自分で設計する発想なのです。学科や専攻という箱に捕われずに、やりたい事やアイディアに応じ

て専攻を変え、製作活動を進め、その実現の為に大学と美術館の施設を利用する事ができるのです。

一般的なアメリカの大学でも環境科学や社会学や哲学などの専攻においては、この総合的な仕組みを採用している教育機関は年々増えてきている傾向はあるようです。しかしながら、芸術やデザイン専門の教育機関ではまだ前例がなく、前衛的な大学だと言えると思います。

## Industry Project

そんな珍しい大学のAIADO学科の中でも、特に魅力的な授業は、大学と企業が連携するプロジェクト「Industry Project」です。僕は大学2年生から携わっており、その特別授業について紹介します。「Industry Project」とは、誰もが知っているような世界的大企業を始め、地元の地域の学校や国内のデザイン会社などと共同で進めるプロジェクトです。企業の社内極秘情報や知識や経験と予算を引き換えに、学生の創造力や研究動力などを企業に提供する仕組みで成り立っています。勿論、学生はNon-DIs秘密保持契約をを交わし、企業は見合った予算を組み、一学期に渡るプロジェクトは発足します。ポートフォリオ選考や面接などの審査を通り、プロジェクトメンバーに選出されたデザインチームは、社会的多様性に富んでおり、全米やヨーロッパやアジアなど世界中から集まります。皆一人一人異なった教育背景や文化を経験している上、違った世代背景があるメンバーで構成されているので、一筋縄では行きません。15週間に及ぶ授業ではメンバー同士学び合い、教え合い、議論を重ねていきます。お互いの意見を尊重する姿勢を欠かせる事はできません。自分にとって当たり前の事が相手にとっては当たり前ではなく、相手に伝わるように伝える方法も考えてコミュニケーションを取らなければならないのです。頭の中ではセオリー上理解している事を実際に行動で示す事は簡単ではないのです。例えば、コミュニケーションにおいて欠かせない第1のステップは相手の意見を「聞く」という事。一見、単純ですが「聞く」という行動は、何層もの次元があるのだと経験を通して体得できるのです。

Industry Project: 2011年春期、IBM連携プロジェクト"Living in a Smart City"の最終プレゼンテーション後の写真。

またプロジェクトでは、様々な観点からの「連携」という言葉と意識が重要視されます。例えば、大学と企業、教授と生徒、大学院生と学部生、社会と教育機関、リサーチとデザイン、チームと個人などが挙げられます。プロジェクトの成功という共通の目的を実現させる為に、多種多様のメンバー各々が自発的に考え、一歩一歩、着実に進めて行く過程はとても興味深く、やりがいがあります。様々な連携を通して、自分一人では想像もできなかった化学反応の連鎖を起こす事ができるのです。

**多様性に富んだメンバー
だからこそ、文化を越えたイノベーション
が生まれる**

プロジェクト進行を通して、授業内だけの「机上の勉強」から、実際に社会に影響を与えうる仕事をする過程は、緩やかな道ではありませんし、難しいから気持ちがいいです。企業の機密情報などに触れる機会もあったり、企業の仕組みを学ぶ事もあったりと、学生であるが故の特権を最大限に利用する特別授業だと思います。そのような貴重な経験は、この大学とその大学が持つ思想だからこそ実現されるのでしょう。

コラボレーションが当たり前になった現代ビジネスシーンでは、実務を通して、その経験の貴重さを体感でき、自信に繋がります。またプロジェクトの最終プレゼンをする頃には、家族のような絆が生まれ、終わりを惜しむように思わず「仕事中毒」になってしまう事もあります。そこで、体調管理などのバランスが大事だとも気付きます。

海外での大学生活と「Industry Project」などの貴重な実体験を通して、「連携」というキーワードが欠かせないモノだと気付く事ができました。「人」という漢字が表現しているように、人と人の関係性は「切っても切れない」関係なのでしょう。この渦巻く現代社会の中、国際的人材作り以上に大切な事は、まずはお互いの心の声を「聞くこと」なのかもしれません。

鈴木 ケビン 健介
Kensuke Kevin Suzuki
シカゴ美術館附属大学
School of the Art Institute of Chicago

ロス・アンゼルスで生まれ、東京とホノルルで育ち、現在シカゴ美術館附属大学にて建築とデザインを勉強しています。

# 留学体験記

University of California, Berkeley
宇野 裕美

## これと思ったら突き進む!

大学入学時、私は自分が大学院で留学するなんて思いもしていなかった。私はとにかく魚が大好きで、魚の研究をして一生暮らせたらどんなに素晴らしいかと思い、大学は理学部に入学したのである。私はずっと京都大学の大学院に残って博士号を取ると思っていた。実際、京都大学では大半の学生が就職かもしくは京都大学の大学院に進学する。ほとんどの学生は、他の大学、まして他の国の大学院に進学するなんて考えてみることさえもしない。私もそんな学生の一人だった。なのに、どうして大学院で留学する事になったのか。それは私が幸運にも巡り会った数々のチャンスと、そのチャンスをものにする“これと思ったら突き進む”という心意気によるものと考えられる。何でもかんでもとにかく突き進めば良い、とは思わないけれど、時にはそんな思い切りも必要なんじゃないかなと思う。なので、私の極端な例も皆さんの参考になればと思い、私の留学への経緯とその後について書き留めたい。

## 海外への目覚め

最初に私が大学院留学という言葉を聞いたのは、ある教授との出会いがきっかけだった。私は大学のちょっと特殊な野外授業でその教授のマレーシアの調査地に連れて行ってもらった。空港に降り立った瞬間からもう周りはトロピカル、人々は私が聞いた事もない言葉を話していた。おっかなびっくりで初めて使う英語を話し、相手に通じて嬉々としていた。旅行中私は見るもの全てに驚かされ、日本と違う文化が世界に存在するんだということにひたすら感動した。同行したその教授の話は、更に私に世界の広さを認識させてくれた。その教授はPh.D.の学位をハワイ大学でとっており、現在も京都大学の教授として海外で研究を行ない、国際会議にも数多く参加されている方だ。彼の話はいつも、私のそれまで知っていた常識からはかけ離れたものだった。その旅行中、私の感激した様子を見たその教授は、冗談半分に『大学院で留学とかしちゃったら良いんだよ』と言った。おそらく本人はもはや覚えてもいないような軽い発言だったのだろうが、そのときの私には、ああそういう選択もあるのかと、将来の可能性に対して広がりを感じさせてくれる発言だった。

その後も私は、京都大学在学中様々な研究者に巡り会い、様々な海外調査に連れて行ってもらう機会に恵まれた。修士での自分の研究での調査も含めると、マレーシアの熱帯雨林に5ヶ月、アメリカの砂漠に1ヶ月、香港に5ヶ月行っていた事になる。海外で手広く活躍する日本人研究者はみな夢にあふれ、たくましく、活力にあふれていた。いつしか私は、そんな世界で活躍する研究者にあこがれ、自分も将来は国境を越えてばりばりと研究をしたいと思うようになった。

国際的に活躍できる研究者になるには、いろいろな選択肢がある。海外での経験はぜひともしたいところだが、大学院で留学したという研究者は日本ではまだそんなに多くはない。ほとんどの研究者は博士号を日本の大学院で取得後ポスドクとして海外での経験を積む。どちらが良いのか、私は色々と悩んで大学の4回生の春頃にアメリカの大学院のシステムなどについて調べたり、色々な人の話を聞いたりし始めた。時を同じくして私は大学の卒業研究で研究室に配属され、論文を読んだり学会に参加したりと実際の研究の世界に触れはじめた。実際の研究に触れるにあたり、いろいろな国や地域の人によって書かれた論文に触れ、その数の多さと質の高さに感動すると同時に日本の学会との格差を感じた。早く世界の広さを感じながら世界に通用する実力を手に入れて、世界に通用する研究をしたいと思うようになった。世界に出ようと決断した以上、博士の学位取得まで日本にとどまる理由はなかった。要はいてもたってもいられなかったのである。

## 決断

特に現在の私の指導教授の論文を読み、彼女の事を知ったときにはその研究の幅の広さと研究に対する勢いや態度にいたく感動し、後先考えずにほとんどその場の勢いで彼女にメールを送った。『大学院生募集していますか?しているならあなたの学生になりたいです!一度訪問しても良いですか?』と。一度目のメールに返事はなかったが、一ヶ月後二度目に同じメールを送ったところ、『おおお。募集してるよ。訪問したいなら今がいい時期だよ、すぐに来れる?』との返事。私はそのままの勢いで、サンフランシスコ行きの航空券をとり、一週間後には飛行機の中にいた。いま思うとよくそんな行動がとれたと思うほどに猪突猛進、後先考えない行動だったと思う。親にも当時の日本の指導教官にも何も話した事もなかったし、私自身留学するかどうかもまだ冷静に判断していなかった。飛行機を降りてバークレーに向かう電車の中ではじめて、英語で話さなければならないという事実に気づいて慌てる始末。しかし、結果的にこれは正解だった。アメリカでは教授初め研究室の人たちと話をして、私もその教授もビビッときた。もう他の選択肢は考えられなかった。

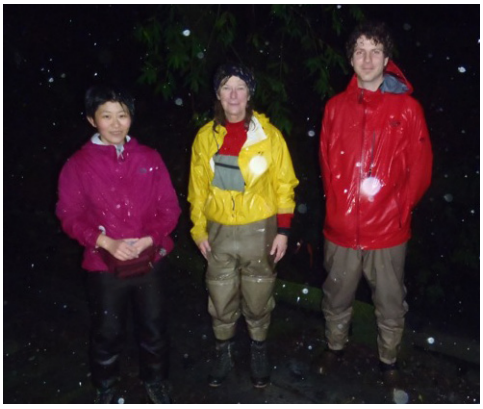
そのとき私は4回生の7月末。帰国したその足で本屋に向かい、TOEFLやGREの本を買い込んだ。そこからは、怒濤の勢いで勉強、受験、奨学金への応募をし、11月末にバークレーに願書を提出した。ただ、自分の大学の卒業研究もしながらの事、さすがに少し準備を始めるのが遅すぎた。TOEFLの点数の不足からどの奨学金も得ることができず、金銭的な問題が解決しなかった。州立大学であるUC Berkeleyの場合、留学生には高い授業料が請求されるため、どうしてもTAではまかないきれない。なので、指導教員の研究費もしくは留学生個人への奨学金が必要だったのだが、不運にも指導教員の研究費はちょうど時期の切れるときだったのだ。そ

れでも現指導教授は私をあきらめきれず、金銭的な問題から合格にはならないと思うんだけどと言いつつ3月に面接に私を招待してくれた。残念ながらそのときはやはり不合格という結果に終わったものの、私も現指導教官もお互いに忘れる事ができず、現指導教官は夏の調査に私を呼んでくれて夏の間一緒にフィールドワークを行った。次の年、今度はきちんと準備をして再度出願をした。幸運にも二度目の正直で奨学金を得る事ができ、UC Berkeleyからも合格の知らせが届いた。

## その後

UC Berkeleyの学生として渡米して、ほぼ一年が経過した。非常に満足している。カリフォルニアのポジティブ思考な雰囲気は私に何事にも挑戦する勇気を与えてくれるし、バークレーのインターナショナルな雰囲気は私の不完全な英語も暖かく受け入れてくれている。何よりも、大学院のプログラムとして様々な実践的な授業をとる事ができて、それがそのまま研究につながるので自分の研究のスキルや幅が格段に広がっているのを感じる。Teaching assistantにも挑戦した。最初はおっかなびっくりだったが、やればなんとかなるもの、最後には楽しく学部生たちとふれあう事ができていた。最初は英語が不安でなかなか人に話しかけづらかったりした事もあったが、もう今ではへっちゃらで国際学会などにも参加してドンドン議論して世界の風を感じながら研究ができている。

留学というと、多くの人はとても大変な事のように思うだろう。でも、何事もやってみれば何とかなるもの。迷っているなら、まぁやってみたらいいじゃない。どこかで思い切りや勢いは必要なものというのが私の経験である。特にアメリカ人はそういうのは大好き。アメリカへの留学を考えるのであれば、行動する前にあれこれ不安要素を列挙するよりも、とにかく体当たりで挑戦してみよう。悩むのは壁にぶつかってからでも遅くない。もっともっとたくさんの日本人が世界を舞台に活躍する日を楽しみにしています。



宇野裕美
Ph.D Program, Department of Integrative Biology
University of California Berkeley

雨の中での調査。左から私、指導教授、ラボメイト。

# 「国際化」の大きな意義：スタンフォード大学研究から考える

ホーン川嶋 瑤子

私は「アメリカの大学」について研究しています。特に、大学の成功や変化に強い関心をもっています。知の革新やグローバル化の加速の時代にあって、大学も変化に弾力的に対応していく必要がありますが、スタンフォード（私の教育学博士課程の母校）は、最も大胆な改革を進め、世界的研究大学へと発展を続けている大学の一つだと思います。そこで、この大学を研究対象として取り上げ、本年3月に『スタンフォード　21世紀を創る大学』を上梓しました。同大学について、教育、研究から、グローバル化、学産連携、大学の歴史まで全体的に紹介しています。以下で、スタンフォードの改革の大きな2つの柱、「学際化」と「国際化」を中心に書きたいと思います。

## 学際化（インターディシプリン）

複雑な社会問題と取り組むには、タコツボ的ではなく複合的アプローチが必要です。特に80年頃からカリキュラムに学際プログラムが増えたのですが、近年それは大学全域に広がっています。教育と研究における「伝統的学科の重要性」と「学科を超える学際性」をうまくミックスした組織化、プログラム化が配慮されています。学生は自由に所属学科の枠を越えて授業を取れるし、他分野の学生・教授とのインタラクションの機会は増え、学際的プログラムの学位取得も可能です。２つの学部にまたがるジョイント・ディグリー・プログラムも増えました。

研究面では、学際的研究を推進するハブとして「広域学際研究所」が急増し、多分野の研究者の参加による共同研究が行われていますが、学生もこのような学際的研究に参加できます。

## 国際化

スタンフォードのもう一つの大きな改革が大学の国際化です。グローバル化が進み、グローバル人材の養成は大学の重要な役割となりました。

大学の国際化は、学生と教授構成の国際化、カリキュラムの国際化、海外留学の機会の拡大、研究トピックと参加者の国際化、海外大学との国際的共同研究および教育提携の拡大等が重要な要素です。大学にとって、優秀な教授、学生は成功に必要な大切なリソースですから、優秀な人材を求めて国際市場で競争しています。学生・研究者もベストのチャンスを求めて国際的に移動する時

代です。国際的共同研究は新しい知の創出に貢献しています。大学の評価・ランキングも世界舞台で行われるようになりましたが、国際性は評価の指標の一つになっています。

スタンフォードでは、大学院生の33％（学部は8％）が留学生です。教室や寮はまさに国際的インタラクションの場です。海外からの研究者や訪問者によるセミナーも多く、キャンパス自体が素晴らしい国際空間になり、多様な文化・言語・思考に触れる国際教育の場になっています。　学部生の海外留学は貴重な教育経験としてカリキュラムに組み入れられ、海外キャンパスは今では京都キャンパスを含めて11校に増えました。海外大学への留学機会もあり、学部生の44％が海外留学を経験します。

## 日本人留学生

日本人留学生の減少は、スタンフォードでも例外ではありません。80、90年代には日本人学生は150人前後もいたのですが、最近は60人程度へと激減。さらに、日本の経済や国際的影響力の沈滞は、大学における日本研究者数の縮小、日本研究専攻学生の減少、日本研究プログラムの縮小等、日本研究全体の活力低下をもたらしています。日本人留学生の減少とあいまって、キャンパスにおける日本の存在感の低下を感じます。中国、インド、韓国等が、留学生数、専攻者数、研究プロジェクトの拡大等で、その存在感を拡大させているのと対照的です。

ところで、留学はどんな価値があるのでしょうか?まず第一に、努力して目標を達成し、自分に自信をもち、自分をエンパワーする機会となること。日本とは異なる教育・研究経験については、このニューズレターで留学生たちが具体的に語っておられるので、ここでは省略します。第二は、既存の理論や思考枠の学習にとどまらず、それにチャンレンジすることを学ぶ。このことは大切です。なぜなら、テクノロジーそして社会変化の激しい時代には、新しいものを創造していく能力、姿勢こそが要求されるからです。第三に、プロフェッショナル（特に研究者）養成過程の経験も貴重だと思います。指導教授との関係は日本ではかなり上下的ですが、スタンフォードでは研究者的な関係を作れることや、TAやRAなどの経験も、学生が単なる学生という以上に、学科の構成員としての責任を自覚する機会であり、自分を成長させる機会だと思います。第四に、学際的、国際的な大学で、多様性、国際性に触れ、世界へと視野を広げ、国際的ネットワークを築くことは、将来への貴重な投資になるでしょう。残念ながら、今の日本の大学では十分に得られないことだと思います。

## 大学の可変力こそ活力の源泉

ここで、私にとって最も興味あるトピック、大学の「可変力」について触れましょう。そもそも大学は独立志向の教授や学科や学部を基礎とする組織だし、財源の制約もあるので、大きな改革を推進することは容易ではなく、リスク・テイクよりも既設路線続行です。しかし、激動の時代にあって、大学も変化していかなければ時代に置いていかれます。グローバル化の中でガラパゴス化してしまいます。変える必要はあるが変えられないとき閉塞感、無力感を生み、「弾力的に変化していく力」は組織に活力を与えます。

スタンフォードは、まさに「変化していく大学」であり、それこそがスタンフォードの成功の源泉だと思います。変化に抵抗する姿勢ではなく、変化を積極的に価値づけてきた伝統や大学文化、リーダーシップやマネッジメント組織の強さ、改革ビジョンの適切さ、大学内外からの大きな支持、改革推進に必要な財源の確保（寄付受取額は近年全米トップ）、社会的ニーズへの敏感性や対応力（外部とのインタラクションの多さ）等々、いろいろな要素が大学に変化力、弾力性を与えています。

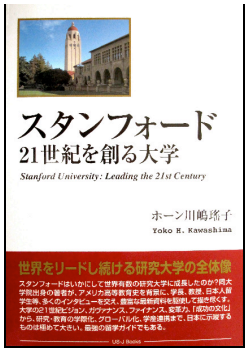
## 日本の大学の国際化を

日本で大学改革の必要が叫ばれて久しいですが、なかなか変わらない。しかし近年、大学国際化の努力が始動しています。学生の海外留学の奨励、日本への外国人留学生の増加、外国人教授や研究者の増加、海外大学との提携や国際共同研究の増加等です。9月入学が議論されています。

スタンフォードとシリコンバレーは、産学連携の成功モデルとして知られていますが、この地域には多数の日本企業も進出しています。最近は日本の大学も進出し、10校以上がオフィスを開設し、大学間ネットワーク組織JUNBA（ジュンバ）もできており、学生の研修滞在の機会拡大に力を入れています。夏には大勢の学生が語学研修に参加しますが、インターンシップ・プログラムも増えています。短期であっても参加学生たちは海外経験から大きなものを学び、大いに刺激を受けて帰っていきます。

アメリカに学ぶ日本人留学生・留学経験者たちからも力強い動きが出ています。2010年に「米国大学院学生会」を立ち上げ、日本の大学での留学説明会、メンター・プログラム、ニュースレター発信を通して、後輩学生たちの留学支援活動を展開しています。留学が学生にとって価値ある選択肢の一つとなることは素晴らしいことです。

いろいろな方面から大学の国際化の動きが生まれ、国際化が大学の大きな改革につながり、最終的に、日本社会に活力を与えるような力になりうるのではないでしょうか。




ホーン川嶋 瑤子 Yoko H. Kawashima

文筆業 writer、大学研究者、スタンフォードで教育学博士号修得
「スタンフォード　21世紀を創る大学」著者

# 連載：The Philosophy of a Bohemian
## （2）自信について

慶応義塾大学理工学部　物理情報工学科
小野 雅裕

日本人はなぜ英語を上手く話せないのか。多くの人が文法や発音のせいにする。違うと思う。自信のない話し方をするせいだ。僕自身も昔はそうだった。英語力に自信がないから、下を向きながら小さな声でゴニョゴニョと話す。当然、相手は聞き取れないから、”hah?”とぶっきらぼうに聞き返す。するとこちらは完全に萎縮してしまい、挙句の果てにソーリー、ソーリーと惨めに繰り返す始末。相手は愛想を尽かし、こちらを無視して他の人と喋り出す。日本では自信過剰の人は疎まれるが、西洋、とりわけアメリカでは、このように自信のない人は相手にされないのだ。

そこで僕は考えを変えた。「お前が英語しか話せないから、仕方なく俺が英語を使ってやっているんだ、文句あるか」と。完全な上から目線である。すると心に余裕が生まれ、相手の目を見て大きな声で話せるようになった。効果はてきめんで、相変わらずの日本語訛りなのに、相手はちゃんと聞いてくれるようになった。

自信は研究にも不可欠な要素だ。アメリカの大学院で研究をしている方は、あなたの先生がスポンサーなどの前で自信満々に大見得を切るのを何度も見たことがあるだろう。彼らは何の躊躇もなく「できます」と断言する。そしてちゃっかりと研究資金を取ってきて、あなたの肩の上に研究課題をずしりと乗せる。あなたが「本当にできるのかな」と不安な顔をしていると、先生はまたもや自信満々にこう言う。「お前ならできる」と。あなたははじめは疑心暗鬼だが、そう繰り返されるうちになんだかできる気がしてきて、事実、気が付いたらちゃんとできている。

自信は歴史すら変えうる。1961年にケネディー大統領は「60年代の終わりまでに人類を月に送る」と豪語した。しかしこのときアメリカは、たった3週間前に初の有人宇宙飛行、それも僅か5分間の弾道飛行を成功させたばかりだったのだ。月旅行が技術的、予算的に可能であるという保証など、これっぽっちもなかった。これはもう、「自信」の域を通り越し、ハッタリと言う他ないだろう。そのハッタリがどんな結果になったかは、皆さんが歴史の教科書で知る通りである。

もちろん、自信を持つことは決して容易ではない。それは常に、有言不実行になり人から嘲笑される不安との、終わりのない戦いだ。湖いっぱいの水の圧力を一手に支えるダムになった気分だ。決壊してしまったほうが楽だと思うこともあるし、本当に決壊してしまうこともある。渡米直後の僕がそうだった。ディスカッションで一生懸命に話しても相手にされず、先生にも認めてもらえなかった。そうして自信を完全に失った時期があった。そこから立ち直り、少しずつ少しずつ自信を積み直していった。その時の体験は過去の記事「レンガを積むが如く」[1]に詳しく書いたので、参考にされたい。

では、どうすれば自信を築くことができるのか。実力が伴わないのにイチローや本田圭佑のような大口を叩いても誰からも信用されない。だからといって、自信がないままではいつまでも英語が喋れるようにならないし、研究資金を獲得することも、人類を月に送ることだってできない。実力と自信、この二つは鶏と卵のように思える。どうすればよいのか。

僕が心がけているのは「5%の自信過剰」だ。たとえ今は青二才の分際でも、努力を続ければ小さな成功に恵まれることがある。英語でジョークを言ったら笑いを取れた、面白い研究結果が出た、提案していた企画が通った。そんなとき、普段よりも5%だけ余計に自信過剰に振る舞ってみる。すると、きっと次には5%大きなチャンスに恵まれ、有言実行するために努力して実力を5%伸ばし、5%大きな成功を得る。そしてまた、自信を5%上積みするのだ。これを続ければいつかイチローや本田のようになれると信じている。

最後に一つ、僕のエピソードを紹介したい。博士課程も終盤になり、そろそろdefense(最終諮問)をスケジュールしたいという頃になった。その許可を指導教官にもらうのが博士課程最大の難関で、十分な結果が出るまで、なかなか首を縦に振ってはくれない。僕がその許可を指導教官に求めた時、おおよそ博士論文は書きあがっていたのだが、一点だけまだ結果が出ていない箇所があった。先生は「あと6週間でできるのか」と聞いた。正直、不安はあった。しかし、根拠はないが、いける、という直感があった。ちょうど先生がスポンサーに対して言うように、僕は自信を持って”yes, I can”と断言した。先生は認めてくれた。

それから6週間、文字通り気合と根性で頑張った。僕の直感は正しく、期待通りの結果を博士論文に加えることができ、無事にdefenseを成功させた。振り返って考えれば、あの場面で「できる」と自信をもってハッタリをかまし、それを実現する力もPh.Dに求められる資質のひとつだったのだと思っている。

小野 雅裕
慶應義塾大学理工学部物理情報工学科　助教

1) http://onomasahiro.net/tsurezure/665

本記事は全６回に渡って連載される記事の第２回目です。

# メンタープログラム特集　1
# メンタープログラムに参加してみて

メンタープログラムに参加された渋谷洋平さん（メンター）と三野智子さん（メンティー）のペアが、本プログラムで体験したことを紹介します。

Dartmouth College
メンター　渋谷 洋平

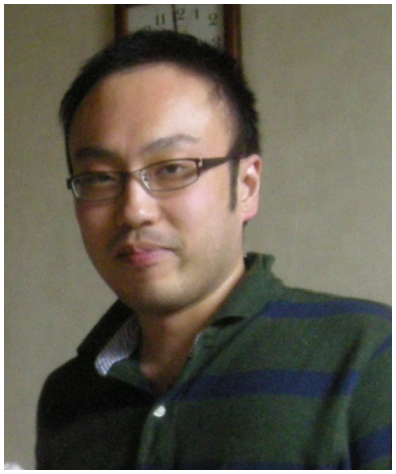
私は昨年度と今年度、メンタープログラムにメンターとして参加させていただきましたが、その中でみなさんに共通していると私が感じたのは、「これで大丈夫だろうか？」とみな常に不安である、という事です。自分の受験当時を思い出すと、正に同じような気持ちでした。そこで、私はメンターとして、彼らの不安を少しでも和らげるよう心がけました。

そもそも、なぜメンティーたちは不安なのでしょうか？大きな理由の一つは、大学院学位留学の情報が少ない事だと思います。ニュースレター2011年11月号で小野氏（米国大学院学生会会長）が指摘されているように、相手側（志望校/志望企業）に、自分がいかにフィットするかをアピールするという戦略が重要という点で、アメリカの大学院入試は日本の新卒就職活動、いわゆる就活によく似ています。しかし就活では、タイムラインや履歴書の書き方、企業訪問や面接のマナーを事細かに記したHow to本やウェブサイトなど、ありとあらゆる情報が簡単に手に入るのに対し、留学希望者が手に入れられる大学院留学に関する情報は、非常に限られています。また、就活の場合、サークルや研究室の先輩など、容易に経験者の知り合いを見つけ、気軽にいろいろ訊ねられますが、学位留学の場合そう簡単に経験者は見つかりません。留学準備を頑張っているメンティーの方々も、参考に出来る情報が少ない、そして相談できる人が居ないために行き詰まって、戸惑っている事が多いように感じました。そこで私は、自分の経験を基にしたアドバイスの他に、私自身が参考にした本やウェブサイト等も同時に伝えるようにしました。また場合によっては自分の知り合いに相談してみたり、第三者を紹介したりして、なるべく多くの情報、経験者の意見を伝えられるように心がけました。

私は全てのメンティーの方に、米国大学院学生会が主催する説明会へ参加する事もすすめました。これは説明会で同じように学位留学を目指して頑張っている人たちと会ってほしかったからです。留学の準備は孤独です。同学年の友人たちが進学や就職の準備をしているのに、自分だけGREに出てくるわけの分からない単語を覚えたり、エッセイのネタを考えたりしているのです。途中で心が折れてしまいそうになるのも頷けます。この、一緒に頑張っている同志が近くにいない、というのも受験者の方が抱える不安の原因だと思います。説明会は大学院留学に興味のある全ての方を対象にしているので、留学になんとなく興味のある人から留学準備中の人、さらには既に留学先が決定した人まで様々な人が参加します。加えて、多種多様なバックグラウンドを持った留学経験者の講師、パネリストの方も参加します。そういった同志の人たちと意見を交わしてみて、下がりかけたモチベーションを上げ直す、という意味で説明会参加は最適だと思います。

留学希望者が不安を抱く三番目の理由は、アメリカ大学院独特の評価システムのため、自分自身の合格可能生が非常に読みにくい、という事です。アメリカの大学院入試は日本のそれと違い、試験の点数が高い人から合格していくわけではありません。推薦状やエッセイといった、点数化しにくい書類が合否に大きく関わります。またGPA、TOEFL、GREといった点数化されるものでさえ、どの程度重視されるかは学校や専攻によって大きく違います。こうなって来ると、自分の成績やスコアで志望校に合格するのだろうか？と非常に不安になるものです。実際、メンティーの方からも、「GPAがこのくらいですが、大丈夫ですか？」とか、「GREはもう少しスコアを取ったほうがいいですか？」といった質問をよく受けました。実をいうと、これらの質問に対する正直な答えは、「わかりません！」です。しかし、このわからない、というのがミソで、GREのスコアが高いから絶対に大丈夫だとも言い切れないし、GPAが低いからと言って絶対にダメだとも言い切れないのです。出願締め切りまで余裕がある人以外は各種テストのスコアを上げるよりも、エッセイなど他の書類に全神経を注いだほうが賢明だと思います。この点をメンティーの方々に理解してもらえるようによく説明しました。

このように私はメンティーの方が感じる不安をなるべく少なくする方向でアドバイスしてきました。これがどの程度効果的だったかは分かりませんが、幸運な事に昨年度、本年度ともに、メンティーの方から合格の報告を頂くことが出来ました。本人の実力が99%以上だと思いますが、少しだけ関わった人間として、大変嬉しく思います。本プログラムを通して合格された方を始め、新たに留学される方々のアメリカでのご活躍をお祈り致します。



渋谷 洋平
Dartmouth College

昭和大学医学部生化学教室研究補助
メンティー　三野 智子

# Molecular and Cellular Biology University of Massachusetts Amherst に進学決定!!

私が出願を思い立ったのは2011年9月という大変遅いスタートでした。出願までの時間が無い上、周りに留学経験者が少なく、何をどうしたものか不安にくれるばかりでした。そんな中で、偶然にも米国大学院学生会の存在を知り、メンタープログラムに参加させていただくことができました。一通りの必要書類はネットで調べることができますが、やはり現役大学院生の生の情報を聞くことができると、大変心強く感じます。メンターの渋谷さんは私の質問に対していつも丁寧に返答してくださいました。質問の多くは、すでに米国大学院学生会のホームページやニュースレターにたびたび登場している内容と重なるものなのですが、自分自身の質問に経験者から答えてもらえると、より説得力があるように感じました。GREこれで大丈夫だろうか、TOEFLもっととらなきゃだめかなあ、とかそんな疑問や不安です。それに対し、実際これこれの点数で受かった人もいるし、落ちた人もいるし、わからないが、より重要なのは…というように一つ一つ答えてもらうと、点数を気にし過ぎること無く他のより重要な書類に気持ちを持って行こう!と思えました。

出願に際して大変だったのは、ステートメントの推敲と自分のモチベーションの維持です。出願を決意した直接の動機は、アメリカで働くには何が何でも学位が無いと相手にされない、としみじみと感じたことでした。個人的な事情によりアメリカでの就職先を探しており、いったん研究室の教授から内定が出たにも関わらず、大学の規定により学位が無いことを理由に就職を断られました。仕事の道が閉ざされてしまうことがとても口惜しく、また、自分自身も学位が無い状態で補助的な仕事をするより、自分で考えて研究をできるようになりたいと思い、出願を決めました。ただ、まだそのときは必ずこの研究をしたい、という明確なビジョンは無かったので、ステートメントの内容を考えるのに苦労しました。これまでの学部での研究内容、職務経験、テクニシャンとして携わった研究の内容をまとめて、これからの研究の希望を書きました。出願までの時間が短い中で、ステートメントを書き上げるのは大変でした。渋谷さんからはステートメントの内容についても丁寧なコメントをいただき、第三者の視点からステートメントを見直すことができました。

ステートメントを書くにも、研究室の情報を探すにも大切なのは気力です。気持ちを維持するのが出願にあたり一番大切なことなのかもしれません。こんな不純な志望動機じゃ合格できないのではないか、という不安で気持ちばかりが焦って、出願書類の推敲に集中することができなかった時期がありました。一人で悩んで何も手につかずにいたときに、メンターの渋谷さんから出願の進行を気遣うメールをいただいたり、米国大学院学生会の案内をいただいたりして、気持ちを奮い立たせることができました。

このプログラムを通して学んだことは、何かやりたいことがあるときには、他の人の助けをかりてもいい、積極的に助言を求めていいということでした。迷惑かもしれない…と思って質問をしないでいるより、知りたいことを質問したほうが自分が何を頑張って行けばいいのかがわかると思います。たとえば、私はCV(履歴書のようなもの)に空白期間があり、それをどのように説明すべきか悩んでいたのですが、あまり気にせずにいいというアドバイスをもらいました。そこに悩むより、何をしたいかをアピールすることを考えるようにもっていくことができました。また、インタビュー前には昨年のインタビュー経験者を紹介していただき、質問内容や答えをあらかじめ考えておくことができました。同じ質問をされる訳ではないのですが、準備をしておくことでリラックスして面接に臨めたのではないかと思います。合格の報告をさせていただいたときには、渋谷さんには非常に喜んでいただけました。大学院に入学してからも授業や生活、研究のなかで困難なことが出てくると思いますが、自分一人だけで解決しようと思い過ぎずに、周りの人に助けを求めながら頑張っていければいいなと思えるようになりました。

今回の出願ではメンターの方をはじめとして様々な人にお世話になりました。学部生時代の先生、以前テクニシャンをさせていただいていた研究室の先生、出願を決めてから急遽研究をさせていただいた研究室のみなさま、不安なときに話を聞いてくれた友達や家族。この場をかりて感謝の意を示すとともに、支えていただいた分、大学院生活を頑張って行きたいと思います。

三野 智子
昭和大学医学部生化学研究室補助

スコットランドのハイキングの最中に。中央が筆者。

# メンタープログラム特集　2
# メンターによる座談会

編集：平林 正稔, 石原 圭祐

米国大学院学生会が主催するメンタープログラム。現役留学生または経験者が、無料で大学院留学を志願する学生を直接サポートするプログラムです。2011年度は、56名のメンターと35名の留学志願者が参加しました。今回は、2011年度にメンターとして参加した今村　文昭さん（Harvard School of Public Health）、犬飼　紗知さん（Yale University）、桑田　良昭さん（Jet Propulsion Laboratory、秋からSpaceX社）、そして渋谷　洋平さん（Dartmouth College）の4名の方に集まっていただきました。メンタープログラム運営担当からは広瀬雅が参加します。

## きっかけ：自身の経験を生かして、留学志望者のサポートをしてあげたい

今村：大学院留学を始めたのが2002年からですけど、それから時間が経って留学制度がどのように変わっているのかに興味がありました。自分の専攻が栄養学・公衆衛生学という特に日本人の博士課程が多くないといわれている領域ですから、何か貢献できればと思い参加しました。

桑田：自分が出願した時は、現在Yale大学で教鞭をとる是永さんにエッセイを添削してもらいました。日本で見てきた英語とアメリカで学位をとった人の英語の能力差に衝撃を受けました。この添削のおかげでMITに合格できたとも思っていて、留学を目指す方々の少しでも手助けをしたいと思いました。

犬飼：Princeton大学で学部を卒業し、Yale大学で大学院に進みました。学部を目指したころは、自分で調べていろいろ大変な思いをしました。以前は学部留学を希望する方のサポートをしていましたが、今は大学院に所属しているということから、大学院を目指す方を手助けしたいと思い参加しています。

渋谷：米国大学院学生会に参加しているという経緯でメンタープログラムに参加しましたが、京都などの特に地方の学生にもっと留学の情報を提供したいと思っています。

## 情報の紹介からエッセイの添削など様々。でも、メンティーが合格してくれると本当に嬉しい

渋谷：私のメンティーは自分で情報を集め、最後に私に質問するという方でした。こういう自主性のある方にとっても、最後にアドバイスや後押しを欲しいと思ったときにサポートしてくれる人がいると本当に心強いのだろうと思います。電話面接に関する質問がありましたが、これは私が現地面接を受けたことから対応ができなくて、他の方を紹介しました。 実は、メンティーの人が米国大学院学生会の主催する説明会まで会いに来ていただき、本当に嬉しかったですね。応募した大学に合格することができて、良かったと思います。

今村：私はエッセイの添削を行いました。応募するプログラムの違いによって内容を書き換えていく必要があり、メンティーと頻繁にやり取りしながら作業を進めることが大変でしたね。幅広く分野を見たいという方だったので、私も勉強になりました。合格までたどり着くことができとても嬉しいことでした。

桑田：エッセイと推薦状の添削が印象に残っています。日本の学生の中には、（残念ですが）自分で教授の推薦状を書かなければならないことがあります。海外を目指す人を、非常に近い距離でサポートでき、メンティーが最終的に志望大学に受かったことが嬉しかったです。メンティーに大学からのいい返事が来なかった間は、ちょっと責任を感じていた部分もありましたし。エッセイについては、まずメンティーに書いてもらい、その後、私が赤でびっしり直すという作業を繰り返しました。アメリカの人は、エッセイを書いたら人に添削してもらっています。日本の人もそういった機会を得ることで、良い受験プロセスを踏んでほしいと思います。

犬飼：桑田さんが言うように、添削のプロセスを踏まないのが理由で、こちらの人たちと同じフィールドに立てないというのは非常に惜しいですよ。そういった面をサポートしてあげたいですね。

## いいペア作りが今後の課題

犬飼：実は、私が対応した方は途中で音信不通になってしまいました。10月あたりからやり取りを始めましたが、通常の準備からすると遅い準備だったと感じています。主にメールでのやり取りでしたが、返信がないと、この返信で大丈夫だったのかなとか、心配するときもありましたね。

桑田：私も同じようなケースがありました。エッセイの方向性などの簡単なやりとりを２、３回したら、音信不通になってしまいました。私自身が留学準備をしていた時、是永さんに添削をお願いすると、あまりになってなかったらしく「まず、この本読んでください。」という返信がきて、ショックを受けて留学無理かなって思ったこともありましたね。小さなすれ違いが、このような音信不通になるのかなとも思いました。

広瀬：運営側から回答すると、アンケートでも多かったのが音信不通という問題でした。このような意見から、メンターとメンティーの関係の改善の向上や、よりスムーズなマッチングのプロセスの構築を目指しているところです。

## このプログラムをより良くするために

桑田：このプログラムの特別なところは、留学を目指す人に個別対応する点です。エッセイについて言えばオーソドックスな書き方があるため、こういう基本的な情報はできるだけ共通化できればいいと感じています。また、私のメンティーは合格通知がなかなか来なくて落ち込むこともありましたが、合格通知は指定期日以降にもらうこともあります。このような経験談も共有し、個別対応によりフォーカスできればと思いました。

渋谷：我々がサポートできるのは限りがあります。エッセイについて言えば、自分でまず書いて、分からなければメンターがサポートするという形が理想だと感じています。このように、メンターが基本的な留学情報までも提供しなくてもいいような環境づくりが必要ですね。

犬飼：どこを受けらたらいいかわからない、どういう準備からはじめていいのか分からない人もいると思います。そういった方に対する基本的な情報源もあるといいですよね。

今村：欧米、北欧、日本の大学によって進路の種類は様々ですし、ともに長所と短所があります。それぞれの情報を客観的に紹介したいですね。

犬飼：メンタープログラムの開始時期を、もう少し早めるといいのではないかと感じました。大学4年生だけでなく3年生から長期的にサポートできると思います。

広瀬：まず情報の共有スペースですが、米国大学院学生会のウェブサイトに構築中です。これは会員制の掲示板で、一つの質問に対して複数のメンターが回答できるというものです。会員であれば、この掲示板を自由に閲覧することができます。プログラムの開始時期についても、今年は去年より数ヶ月早い開始となる予定です。最後に、留学開始後はメンターとメンティーという枠を超えて、良き友人になってほしいと思います。今回はメンターの方からいろいろなお話を伺うことができ、今後のメンタープログラムの向上のために良い経験となりました。どうもありがとうございました。

**米国大学院学生会** http://gakuiryugaku.net/

**【ニュースレター編集部】**

平林 正稔　石原 圭祐　原 健太郎　大勝 裕子
山田 亜紀　高野 陽平

newsletter@gakuiryugaku.net

**執筆者を募集中！**

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

## 編集後記

**米国大学院学生会の Facebook ページができました。http://www.facebook.com/gakuiryugaku**
**こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！**

今回ふと中高時代のクラスメイトであった辻井快君に今月号のニュースレターで留学体験談を書いてくれないかと頼んだのが、事の始まりでした。思えば京都の中学の一年の時に知り合った旧友が今はお互いアメリカの大学院で共に勉強しています。これからも長期間研究テーマに向き合いながらお互い勉学に励み、日本人院生の仲間と共に成長していければと思います。（山田）

先月、ようやくdefenseが終わり、thesisも先日提出してきました。 卒業式まで１ヶ月、投稿論文のための追加実験をしつつ残りのアトランタ生活を楽しみたいと思います。「楽しみ」の第一弾は海です。アメリカでは初めてなのですごく嬉しい　です。（大勝）

大学院留学の途中でコロラドからジョージアへ移動したことを機にニュースレターの読者から編集，発信する立場として新しく参加することができとてもうれしいです。活動参加を通じて様々な経験が出来ることを楽しみにしています　(高野)

今夏、6月に名大と東大で説明会を行いました。嬉しいことに、3年目にして、過去の説明会を通して留学を決意した人と数名会う機会がありました。普段忙しい大学院生生活も、この学生会の活動も地道にしていけば少しずつ成果となって現れてくることを実感しました。（原）

ボストンから1時間半ほどの海辺にある、ウッズホール海洋生物学研究所に来ています。毎年夏は世界中から生物学者が集まり、ちょっとした科学者のサマーキャンプ。毎日いろんな人の講演を聞き、実験し、休日は気軽にケープコッドの海も楽しめて、ボストンとのギャップがいい気分転換になっています。7週間ばっちり楽しみたいです。（石原）